

Title	第353回京都外科集談会
Author(s)	
Citation	日本外科宝函 (1959), 28(3): 1043-1044
Issue Date	1959-04-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/206793
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

第 353 回 京 都 外 科 集 談 会

昭和 34 年 1 月 29 日

(1) 特発性筋ヘルニアの 1 例

外科Ⅰ 近藤 祐之

筋ヘルニアは特にスポーツによる外傷として時に見られるものである。最近経験した一例を報告する。30才の男。7～8年前迄4～5年間中距離の選手をしていた。昭和33年12月中旬、特発性高血圧症様発作で倒れた後より、左大腿前面運動時痛性腫瘍に気づいた。手術時左大腿直筋外側部の筋ヘルニアであり、筋膜裂隙は認められなかった。又筋や筋膜等に炎症性変化は認められなかった。この例でも陸上競技をやつていた事あり、この時に大腿直筋の固有筋膜の不全断裂を来していたものが、高血圧発作で倒れた時の筋のアトニーの状態より、反射的に体位を保持せんとするために急に強い筋収縮がおこり筋断裂或は筋膜の不全断裂を一層強くして筋ヘルニアが出現したものと考えられる。患者自身外傷に気づかず引きおこされた筋ヘルニアの一例である。

(2) 破傷風12症の経験

外科Ⅱ 中村史郎・内田幸夫

最近10年間に当教室で経験した破傷風12例に就いて報告する。症例が少い為職業別、性別、年齢別には著しい傾向は認められないが、菌の侵入門戸となつた創の種類は挫創4例、刺創3例と定型的な傾向を示した。

死亡例4例のうち、大槽穿刺により抗血清注入後、痙攣発作が増悪し、窒息死した2例がある。抗血清投与方法について、予後に著しい差は認められない。

治癒例のうち1例は異物摘出に伴う再発例である。初回の発症時抗血清を使用している為、再発時の投与にさきだち、過敏症を警戒して脱感作処置を行なつた。

鎮静、鎮痙に各種薬剤を使用した、クロールプロマジン併用した4例は良好な効果を得た。

(5) 虫垂切除の小さいたまたま発見された

日本住血吸虫症の 1 例

日本軽金属株式会社蒲原工場診療所

花島 得三・池内 彰

吾々は虫垂切除のさい発見された盲腸壁の結節及び虫垂間膜のリンパ腺に、日本住血吸虫卵を証明したが

虫垂自体には虫卵を発見出来なかつたので虫垂炎との因果関係については何とも云えない。たゞ文献によれば有病地に於ては、虫垂切除で摘出された虫垂内には高率に虫卵が発見されるので留意する必要がある。

(4) 避妊術後に於ける卵巣妊娠の 1 例

大阪野江済生病院 西田 茂樹

(5) 所謂 Cystosarcoma phyllodes の 1 例

奈良医科大学第 1 病理学教室

伊 藤 信 行

大和田市民病院外科

杉本雄三・玉木泰嗣・岡本正信

我々は所謂 Cystosarcoma phyllodes に属すると考えられる 1 症例を経験したので報告する。42才の女。約20年前から左乳房が右に比し大きく、7年前より同部に腫瘍があるのに気付いていた処、6ヵ月前から急に増大して来た。凹凸不平、弾性硬の拳拳大の腫瘍。逆行性乳房切断術を施行した。割面は灰白色で小腔胞の形成がある。組織学的に腺管の形成が不規則で腺管上皮が一部乳嚢状に増殖しているが悪性像はない。間質には星芒状又は紡錘状の細胞増加、核分裂があるがその程度は軽度である。或る部分では浮腫状を呈しているが mucicarmin 染色、pas 反応で陽性物質はない。又軽度に膠原線維の増加が、硝子様化を示す所をも認める。以上の如く間質細胞の異型性はみとめられても、その程度は軽度で良性と云うべきであり、Cystosarcoma などと云う名称は適切でなく、Fibroadenomaの一亜型と Giant fibroadenomaとも云うべきであろう。

(6) Hand-Schiiller Christian 病か？

Rhabdomyosarkom か？

外科Ⅱ 野々山明・浜垣仁

14才の男児で、臨床的には頭蓋骨欠損(地図状頭蓋)、尿崩症、眼球突出のいわゆる Christian の三主徴の何れも認められないにもかかわらず、病理組織学的にびまん性の細網細胞増殖と多数の好酸球の浸潤を認め、Hand-Schüller-Christian 病と考えられる 1 例を経験した。しかも本症例は病理組織学的にも若干の異論があり、腫瘍細胞に横紋を認める横紋筋肉腫であると主張する病理学者もあり、臨床的、病理組織学的

に興味深いと思われるので、若干の考察を加えて報告した。

(7) 膝関節前交叉靱帯形成術

玉造整形外科病院 清家 隆介

1) 22才男子の内側半月板損傷を合併した陳旧性前交叉靱帯断裂に対して半月板剔出及び Hey Groves法による前交叉靱帯形成術を施行し良好なる結果を得た。

2) 本症には大腿四頭筋萎縮、半月板損傷、外傷性関節炎等、陳旧化した膝関節機能障害を合併したものが多く、且つ膝の支持性は関節構築に関与する全ての器官の協和によるものであるとの見地から術後は早期より膝自動運動を開始し筋力の保持、関節運動の正常化に努めるべきであると考えた。

3) 形成せる筋膜片の上下端の固定には主力を上端は腱筋膜下端は反転して内側副靱帯に求め、術後関節

運動時の新交叉靱帯過緊張の懼れに対し多少の弾力性をもたせる様に工夫した。

追加

整形 鶴海 寛治

前交叉靱帯形成術予後可動性良好となると共にヒキ出し症状の再現する症例がある。もう少し長い経過を見てもらいたい。

答

現在術後三ヵ月で後療法を継続中である。伸展178°屈曲34°と良好である。正座も少時なら可能である。関節運動良好であるにかゝらず抽出し現象は再現していない、尚経過をみたい。

(8) 人工骨節置換術に関する知見

玉造整形外科病院

大塚哲也・山田 栄・林 瑞庭
笹井義男・水清隆介・牧野文雄
宮武正弘・古庵雄三・田村哲男

岐 阜 外 科 集 談 会

時 昭和33年11月26日

所 岐阜市朝日新聞岐阜支局

(1) Pilonidal Disease に就いて

岐阜医大第一外科 村瀬 晃朔

本病は臀部正中線殊に仙尾関節部に好発するもので慢性炎症性、異物性の肉芽性反応を示し Cyst 又は Sinus として認められ、内腔に大多数に於いて毛髪が認められる。

本病は思春期から25才迄の間に多く認められる。その発生源は未だ決定的でなく先天性説、後天性説、先天後天説等色々述べられている。

本病は欧米人に多く見られ我国に於ては甚だ稀なる疾病である Pilonidal Sinus の一例を経験したので発表した。

(2) 硬膜下血腫

岐阜医大第二外科 上田 茂夫

過去2年間に教室に於て経験した慢性硬膜下血腫5例につき報告した。同期間に於ける頭部外傷入院患者の約8%にあたり25才から56才で全例男子であつた。5例中1例は外傷の経験なく左橋角症候群を呈し手術により偶然左天幕上硬膜下血腫を発見し血腫並びにその被膜切除を行つたもので、他の1例は12年間痙攣発作を主訴として経過し硬膜下に慢性骨化した血腫を認

め除去したものである。手術としては穿頭術により血腫内容除去のみを行つたもの2例、被膜切除を併用したもの3例である。

(3) 縦隔腫瘍を疑つた肋膜炎症例

岐阜医大第一外科 渡辺 克

最近経験せる34才男子の術前の諸臨床症状及びレントゲン検査により恰も縦隔腫瘍を疑わせる所見を認めたが、開胸手術によつて結核性肋膜炎の誤診せるものであつた症例に就て報告した。

(4) 教室における食道癌手術の経験

岐阜医大第二外科 斎藤 晃

最近食道癌の早期発見の努力によつて、根治的手術を施行する症例が増加しつつある。我々の教室でも過去一年間に5例の手術を経験したので、これらの症例をまとめてみた。

性、年齢、初発症状等は概ね過去の統計的観察と一致していた。手術は食道及び胃噴門部を切除した後、胸腔内食道胃吻合を行つたもので、術後は一例の肺浮腫によると思われる死亡以外は比較的順調な経過を辿っている。

術後愁訴としての一過性下痢或は便秘、食後胸骨後